

日々思うこと

鵜縁 臨床文藝医学会監事、薬剤師

僕は中学、高校と柔道をしていた。高校時代のある試合でとても不思議な経験した。

試合に臨む量がとてもまぶしく光ったよう見えその後、あたりは真っ白になり気がつけば試合終わり、勝利していたのである。

試合の最中の記憶はなく、一体どうしてそのような状態になったのかは不明である。

胃ゆる”無”の状態であったのだろうか。

試合に勝つために、新しい技を習得するための練習をする。課題を見つけ修正する。すると今までできていたことが出来なくなり、またそこを修正するために新たな課題を見つける。無意識にその技を使える様になるまでひたすらそれを繰り返すのである。

そして、いざ試合となると緊張やプレッシャーによるものか、練習をしたことを意識しだすと練習ではできていたことができなくなる。

無意識であったものを意識することで、無意識にできていたことが出来なくなるのである。

柔道は相手がありきのものである。相手の動きに合わせて、技をかける。もしくは技をかけるために相手をこちらの動きに合わせさせる。そこで様々な駆け引きがおこる。

自然と相手の動きに合わせて自然と技が繰り出されるのが理想的なのだろうが、なかなかそうはできない。

技をかけることを意識する。すると、そのことに囚われ、無意識にできていたことができなくなることがある。

それは、相手の動きを観察できていないからではないかとも思うことがある。

格闘技やスポーツを私の仕事(調剤薬局の薬剤師)に置き換えて考えることがある。

思慮深く、しかし、素早く的確に業務をこなし、患者からの信頼を

得られるような方がおられる。
その方に何を考え仕事をしているのか話を聞くと、「ただ仕事をしているだけ。」と答えた。

今までの経験や日々の勉強などもあるのだろうが、無意識にその役割を全うしているようにも感じられる。

一部の方々を除けば、知識のアップデートやエビデンスの収集（これをしていればまだ良いが。）、もっている知識を、制度や立場に縛られながら、相手を観ずに伝える。

結果、根本的な解決には至らない。といったことを繰り返していることが少なからずあるように思われる。

本当に技を身につけるとは何なのか。

利益を求める事、正義を貫こうとすること。何かを思い仕事することは決して間違っていることとは思わない。

ルールや人間関係など、あらゆる柵の中でパフォーマンスをしなければならないが、患者に関わると

いう点においては、何か囚われずに無意識に寄り添うことができればと思う。